

平成25年度  
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI  
(研究成果の社会還元・普及事業)  
実施報告書

HT25090

【プログラム名】  
「動き」を感じるころの仕組み～脳が生み出す動きの知覚～



開催日：平成25年8月3日(土)

実施機関：立教大学新座キャンパス  
(実施場所) (6号館など)

実施代表者：日高 聡太  
(所属・職名) (現代心理学部心理学科・准教授)

受講生：中学生32名

関連 URL：[http://www.rikkyo.ac.jp/research/initiative/activities/event/fy13\\_hirameki\\_report/](http://www.rikkyo.ac.jp/research/initiative/activities/event/fy13_hirameki_report/)

【実施内容】

●受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

- ・研究成果を十分に理解してもらうために、講義中にプレゼンテーションソフトおよびデモンストレーションムービーを多用し、研究成果として見いだした現象を実際に体験してもらった。
- ・さらに、受動的に講義を受けるだけではなく、体験学習として、体験型装置を用いて能動的に錯覚現象を体験させることで、ころや脳が生み出す現象とそのメカニズムをリアリティのあるものとして感じてもらうようにした。
- ・学内にある既存の錯覚体験装置を十分に活用しながら学内見学を実施することで、心理学に対して幅広い興味を持ってもらうと共に、大学やその研究に対しても強い関心を引きつけるようにした。
- ・体験学習および学内見学に関しては、専用の学内マップを配布し、受講生がロールプレイング感覚でプログラムを体験できるようにした。
- ・実施協力者に適宜運営補助に当たってもらい、受講生に常に気配りを行える体制を導入するだけではなく、休憩や昼食の時間を共有することで実施者との密接な交流をはかった。

●当日のスケジュール

- 9:30-10:00 受付(立教大学新座キャンパス6号館3階に集合)
- 10:00-10:30 開講式(あいさつ、科研費の説明、プログラムの説明、実施協力者の紹介)
- 10:30-11:30 講義「動き」を感じる脳ところの仕組みとは」
- 11:30-11:40 休憩・体験学習準備
- 11:40-12:40 体験学習(「バイオロジカルモーション」・「ラバーハンドイリュージョン」・学内見学)
- 12:40-13:45 昼食(研究者・大学院生・大学生との交流会を兼ねる)
- 13:45-14:00 全体討論・質疑応答
- 14:00-14:30 修了式(アンケート記入、未来博士号授与、記念撮影)
- 14:30 終了・解散

●実施の様子

- ・講義については、私語もなく、静粛な環境で熱心に聴講する姿がみられた。父兄の方も同時に参加していた。



- ・体験学習については、実施協力者と共に学内を見学し、適宜説明を受けることで、実施中に興味と関心を持続している様子であった。父兄の方にも好評であった。



- ・昼食も学生食堂を利用することで大学の雰囲気を経験させることができた。



- ・アンケートの結果からも、総じて企画の趣旨や意図が伝わる形で実施でき、受講生も満足していたように見受けられる。



### ●事務局との協力体制

リサーチ・イニシアティブセンターを中心に関係部局が必要に応じて連携し、事業の成果を最大化した。

- ・リサーチ・イニシアティブセンターが事務局の全体統括、委託費管理、連絡調整、各種書類・報告のとりまとめを行った。
- ・教学連携課を通じて、富士見市や新座市などの協力を得て、近隣の中学生に案内を行った。
- ・会場の準備にあたっては施設課等関係部局が連携しながら進めた。
- ・広報に関しては適宜広報課とも連携しながら進めた。

### ●広報活動

実施代表者は以前、教学連携課と協力して、富士見市の小学生を対象に「子ども大学ふじみ」というプログラムを実施した。そこで得た経験と協力体制をもとに、リサーチ・イニシアティブセンターおよび教学連携課が連携し、埼玉県教育局生涯学習文化財課を通じて新座市、富士見市に依頼し、実施者の主導のもと作成した案内チラシを市内の全中学校に配布した。また、大学の広報課とも連携し、大学のHPにチラシおよび募集案内文を掲載し、また実施後の広報も行った。

### ●安全配慮

- ・講義に関して、映像を通じて様々な錯覚現象を体験する最中にもし気分が悪くなった場合には、すぐに退出して休憩できる旨、当日のプログラム説明や講義開始前の際に複数回にわたって注意喚起と周知を行った。また、複数名の学生アルバイトを講義会場に配置し、常に受講生の様子に気を配るようにした。
- ・体験学習に際しては、気温が高い時期に実施する事を十分考慮し、体験型錯覚装置を用いたデモンストレーションや学内見学はほぼ全て屋内で実施し、屋外での活動は必要最低限に留めた(15分程度)。また、受講生約10名毎に学生アルバイトを2名配置し、常に参加者の様子に気を配るようにした。さらに、休憩時や昼食時に飲料を配布し、脱水症状等が生じないための措置を行った。
- ・受講生および同伴者、一部の実施協力者を対象に、短期の傷害保険に加入した(その他の実施者、実施協力者については、機関が加入している保険が適用されることを確認した)。

### ●今後の発展性、課題

- ・今回、得られた研究成果の公表に加え、一般的な知見を含む心理学に関する講義と既存の装置・設備を用いた体験学習を実施したが、中学生にはやや物足りなかった印象もある。例えば、受講者に実際に心理学実験へ参加させ、得られたデータの分析やその解釈を行うという作業を行わせることで、より実際的な心理学に触れてもらう契機になると考えられる。
- ・参加者が中学1-3年生までと幅広い年齢を対象としたため、特に低学年生にとっては理解が難しい内容が含まれてしまっていたように思う。幅広い年齢層を対象とすることを前提に準備を行う必要が考えられた。また、最初から年齢層をある程度絞った形で募集を行うことで、より適切な運営が可能になると考えられた。
- ・実施者および実施協力者と共に昼食・休憩を共にし、自由に会話をする機会を設定したが、参加者同士を含め初対面であったため、話題の設定に苦勞し、意図したような活発で有意義な交流が行われなかった。事前に参加者への課題として質問を準備させ、それに実施者および実施協力者が回答する、あるいはグループ作業を設け参加者間および参加者と実施者および実施協力者で交流する機会をきちんと設定するなどの工夫が必要であると考えられた。

### 【実施分担者】

【実施協力者】                      9名

### 【事務担当者】

伊藤 直子    リサーチ・イニシアティブセンター・課員